



私とロータリー

第2680地区 パストガバナー

深川 純一

ご紹介を頂きました深川でございます。先ほどRI会長代理の南園先生からこのロータリーの現状を冷静に分析なさった素晴らしいお話を拝聴しました。今度私は、「私とロータリー」というごく個人的な立場からお話をするようになります。しばらくお耳を拝借したいと思います。

「私とロータリー」というテーマを頂いておりますが自分の事をしゃべるといのはしゃべりにくいものがありますからそれと私とロータリーといってもすべて先人からも授かり物でございます。私自身が開発したものは何もございません。従ってポールハリスはじめ多くの先人達のいろいろの本を読み、そして沢山の先輩たちからいろいろな話を聞き、私なりに沢山ことを学んでまいりましたが、今日はその中から特に引き付けられた話といえますか、魅力ある話を二・三紹介しながら私のロータリーについての考え方の一端を述べさせて頂きたいと思うわけでございます。

昔、東京ロータリークラブに長瀬富郎さんという素晴らしいロータリアンがいらっしゃいました。

その方があるとき仮定の質問をされまして、この地域社会からロータリーが消えてなくなったらこの地域社会の人たちは悲しむであろうか、長瀬さんはそれに対して何等の痛痒も感じないだろうと答えておられます。

この対話には二つの考え方が成り立つと思いません。まず一つはこの地域社会からロータリークラブがなくなったとしても何等の痛痒も感じない、そのようなロータリーであって果たしていいのかな、という一つの警告の意味であります。

それからもう一つは、この地域社会からロータリークラブがなくなったとしても太陽は東から昇って西に沈み、人々は朝早くから働きに出て夕べに

は疲れを癒すでしょう、人々の生活環境にはなんらの不便も感じない、何等の干渉することもない、それがロータリーと地域社会との関係だよという言葉も返ってくると思います、そして地域社会と直接かかわりあいのない、それもロータリーだ、それこそロータリーだという考え方も成り立つだろうと思うんであります。この考え方は陰徳陽報の教えだと中国の書物に出ておりますが、陰徳、隠れたる徳のある行いというのが陽報明らかなる報いがあるよということなんであります、この陰徳陽報の教えこれからいきますとこの地域社会にロータリーがあってもなくても、なんらの痛痒も感じない、じゃあそれでいいのか、この陰徳陽報論者はそれでいいと言い切るんであります。

地域社会にロータリークラブとかロータリーというものは知られなくてもロータリアンが一生懸命地域社会のために働いて地域社会のお役にたっていればいいじゃないかこれが陰徳陽報論者の答えなんであります。そしてその代表的な方が日本にロータリーを初めてお作りになった米山梅吉先生でありこの方が陰徳陽報論者の最たるものであったのであります。先生は世のため、人のため、のこと、世のため人のための奉仕に、殆ど一生を捧げられた人であります。

先生の収入はともうしますと、半期のボーナスが一万円、ただしこれは大正の末期、昭和初期にかけてであります。その時の大学卒の初任給が60円くらいの時に一万円のボーナスをもらっておられた、今ジャーナリストが換算しますと10億円くらいだろうというのであります。半期のボーナスが10億円、1年間で20億円のボーナス、ずいぶんお金持ちになるんだろうなと皆さん思われるかもしれませんが、その殆どを世のため人のために使

われた方なんです。分かりやすい一例を一つ、ある人が東京大学に入学なさって入学したとたんにお父様が亡くなられました、学費が続かなくなったのであります。それを米山先生がお聞きになりまして、ある人に、一体いくら位いるんですか、とお尋ねになって大体30円あればいいでしょう、大学卒の初任給が60円の時の30円でありますからそれで十分いけるはずなんです。米山先生はそれをお聞きになりまして、それは最低額でしょう、私は倍出しましょう、60円出しましょうとって毎月その学生に学費を貢がれたそうであります。

ただ一つ条件がある、私がお金を出したということを経験言ってもらっては困る、ある篤志家が、とだけお伝えを頂きたいと、そのように致しまして、大学を出るまでずっと学費を貢がれたんです。やがて米山先生が昭和22年4月17日にこの世を去られました。間に立っていた人が、先生も亡くなられたんだからもういいだろうと、その学生時代に学費を貢がれた人に、その方はある大学の教授になっておられたんですが、あなたが学生時代に学費を貢いで下さったのは今度お亡くなりになった貴族院議員の米山梅吉先生ですよ、せめてお葬式ぐらいには行かれたらどうですかと、その人は、取るものも取り敢えず飛んで行かれたというエピソードが残っております。

実はその人だけではなかったんであります。米山先生はそのようにして沢山の人たちを育ててこられました。東南アジアからの留学生が困っておられればそれにも出された、そのようなことが起因になりまして米山先生がこの世を去られた後で東京ロータリークラブが米山記念奨学会というものを作られたわけでございます。やがて、日本全国のロータリーがそれを支援しようというので、今日の米山記念奨学会というものが成り立っているわけでございます。

これなんかも代表的な陰徳陽報論者、自分のしたことを決して人に言わない、とそういう形で奉仕の実践というものを続けてこられたわけでございます。従って私はこの考え方もロータリーの素晴らしい魅力の一つだと思うわけでございます。魅力というのは大変大事なことでありまして、ただしこれは主観的でもあります。ある人にとっては魅力であって、ある人にとっては魅力でないこともあります。従ってそのレベルで議論をしますとロータリーの魅力なんて様にならないんでありま

すが、ロータリーの魅力というものは飽くまでもロータリーそのものに内在している魅力のことを言わなければならない、これがなくなったらロータリーじゃないぞ、そういうロータリーだけしかない魅力というものがあるわけでございます。

そういうものを指してロータリーの魅力だと言うべきだと私は思います。『ローマは一日にしてならず』という言葉がございます、ロータリーは一つに社会制度として今日の存在をなしたのは正にロータリーに魅力があったからでございます。ロータリーというものはロータリアンにとっての魅力であったし、またロータリークラブにとっても社会にとっても魅力的であったわけでございます。

すべての社会制度、学校制度、会社制度、軍隊あるいは国家、地域社会、全ての社会制度というものは、社会の要請に従って生まれて参ります。そして社会の要請に従って発展をしていきます。そして魅力がなくなって社会の要請がなくなると、脆くも潰れ去って行くのが世の常であります。

一番極端な例を申し上げますと紀元前3世紀から紀元後3世紀まで続きましたあの古代ローマ帝国でございます。あれも社会の要請に従って生まれ社会の要請によって発展をしていき隆々と栄えていきましたが、紀元後3世紀に脆くも崩れ去った、これは社会の要請がなくなった魅力がなくなったからなんであります。しかし古代ローマ帝国は制度として組織としては滅んでしまいましたけれども、あのローマ人が作り出した優秀な思想というものは無くなるのがなかったんであります。

古代ローマ帝国が壊滅するその寸前にローマ人達が作り出した素晴らしいローマ法典というものがございまして、あの中で作り出された所有権に関する思想というものは、その後2000年近く歳月を費やして今日の私たちの民法という法律がありますが、その中に脈々と受け継がれているんであります。

民法の206条というのに、所有権というものの定義があります、所有権とは物を自由に使用収益処分する権利をいう、これは古代ローマ法典で打ち立てられた原理そのものの宣言が今日の日本の法典の中に厳然として残っている。これは組織としてのローマ国、そして制度としてのローマというものは滅びてしまった後でも思想としてのローマ法典、ローマ法というものは滅びていないとい

うところが分かるわけでございます。

一つのとえ話をしておきます。二人のお坊さんがいました。刀を持って喧嘩をしたんであります。一人のお坊さんは相手のお坊さんの首をパーンと刀で撥ねた、その首が中空に飛び上がりましてやがて2000年後のあるお坊さんの首にスパットおさまった、このことを何と解くかということでございます。刀で切られて首と胴が別れたんです。地上に倒れた胴体を組織とか制度と考えてください。そして中空に飛び上がって2000年後のやがて他の坊さんにスパット居座った首のことを思想と考えてください。組織と思想のとえ話を私はしようとしています。一体そんな例があるのかと言いますと、私達のこの日本のロータリー、戦前、戦中、戦後にわたるロータリーの中でそのお坊さんの首の物語にそっくりな話があるわけあります。そのことを私は実は誇りに感じております。

どういふ話かと申しますと、日本のロータリーは昭和の初期から、軍閥からある忌まわしい弾圧を受けだしたわけでございます。ロータリーというのはアメリカに本部があるスパイの手先だと、あるいは隠れみのだと、いろんな口実を並べられて弾圧を受け続けていった。

潰してしまおうというわけです。昭和8年であります。京都のロータリークラブに壮士の一団が押しかけてまいりました。ロータリークラブの会長にですね、こういうクラブは天皇陛下の御為にならないから直ちに解散しろ、と例会を認めないと迫ったのであります。時の会長石川吉次郎さん京都電鉄の社長でありましたが、石川さんがロータリークラブは職業奉仕を旨として皆が世のため人のために力を合わせているので、あなたがおっしゃる不当な団体ではありませんよと言ったんであります。壮士の一団は納得しない、それだったら証を立てろ、証拠を見せろと言ったんです。そこで石川さんは……………

慣例はございません、しかし私たちは天皇陛下の御為にもロータリー運動をやっているのだという証を立てるために、これからは例会場に国旗を掲げましょう。

それからもう一つロータリークラブは同じように国歌を歌う慣例を持っておりません。しかしこれからは天皇陛下の御為にもロータリー運動をやっているんだという証を立てるためにこれからは例会場で君が代を斉唱しましょう、この二つの条件

を出したんであります。それを聞きまして壮士の一団はよし分かったと言って退散していきました。

それを聞いてロータリーの人たちは例会場に日の丸を掲げ、そして君が代を斉唱することは多くを撃退するのに非常に効果があるよ、とってそれから日本のロータリークラブでは例会場に日の丸を掲げ君が代を歌う慣例が出てきたわけであります。

これなんかも私たちの先輩がですね、軍閥の弾圧を避けるために血も滲むような思いで編み出した慣例なんです。だから皆様方もただ漫然と君が代を歌い、日の丸を掲げるのではなくて、我々の先輩達がやはり苦勞をしてきたんだなということを一いつ心に留めておいて頂きたい。

しかしそのようにして一生懸命抵抗を致しましたけれども、ああいう軍閥の力というものの、権力には抗することはできませんで、昭和15年8月8日に静岡のロータリークラブが真っ先に解散を致しました。次いで8月12日に大阪ロータリークラブ、19日に岡山ロータリークラブ、21日には京都のロータリークラブ、次々と解散をしていまして、やがて東京ロータリークラブが9月11日を迎えたのであります。

日本ロータリーの創始者でありました米山先生が重い足を引き摺って東京ロータリークラブの壇上に立ちました。日本全国のロータリアンが一致団結している間ならばともかく、散散ばらばらになっては、もはや手の施しようがない、ここは一つ解散をして時の来るのを待とうと、しかしながら日本国のロータリーが日本国の地域社会に対して社会的にも経済的にも文化的にも様々な伝統を打ち立ててきたことは紛れもない事実である。私には今様なことが走馬灯のように脳裏を過ぎっている、しかしもはやこのような時代に至っては解散の他にないまい、事ここに至った私の不行き届きをお詫びしたいとって壇上を降りたのでございます。

日本のロータリークラブが軍閥の弾圧によって壊滅した最後の姿だったんです。それで終わったのかなと思いますと終わらなかったんであります。その当時ロータリアンが2,142名、今から比べると本当にわずかな数であります、みんな一騎当千の精鋭で粒揃いでありました。

ロータリークラブが48クラブありました、本州に37クラブ、朝鮮・満洲に各4クラブずつ、そし

て台湾に3クラブ、合計48クラブです。規模は非常に小さかったのですが、中中しっかりしたロータリークラブでした。私は神戸ロータリークラブの直木太一郎パストガバナーにこの日本のロータリークラブのことを沢山教わりました。その直木さんがおっしゃっていました、神戸ロータリークラブは、昭和15年9月5日に解散をしたんです。神戸ロータリークラブは木曜日を例会にしておりましたから、もう解散をすればもう神戸ロータリークラブと名乗ることができません。そこで神戸木曜会と名前を変えまして9月5日に解散しました。その後9月12日には神戸木曜会として同じように例会活動を始めたのであります。

国際ロータリーから脱退した後と同じような例会活動を続けていったということは大変なことだったのであります。東京クラブは東京水曜会、大阪は大阪金曜会。ちょっと変わっております札幌クラブでございますが、札幌職能協会と名前を変えました。これは職業奉仕を振った言葉なんです。福岡は福岡清和協会、清く和すると書いて清和会、このように致しまして全国のロータリークラブが活動を始めていった皆さん方、潰れたって名前を変えてやれば良いじゃないか、とお思いになるかもしれませんが、どういう理由で解散させられたのかということを考えますとこれは大変なことだったんです。何故かと言いますと、ロータリークラブというのはアメリカに本部があるスパイの手先だと言われて解散させられた、それにもかかわらず同じように名前だけは変えたけれども同じ場所で同じようなメンバーがまた会合を持っているということはいつ憲兵隊にしょっぴかれるかもしれない、そういう危険を孕んでおりました。現に神戸ロータリークラブには特別高等警察、特高警察とありますが、それが例会毎に必ず来て検閲をしていたのでございます。そういう中で解散に追い込まれてそしてまたやり出したということは一つ間違えると自分の身に危険が迫ることを覚悟の上で彼らはやりだしたわけです。やがて戦争が始まりまして、そのうち戦災にあって東京もそうですが、全部が焼け野原になりました。それで例会活動を辞めたのかと言いますと辞めなかったのです。神戸ロータリークラブは確か同和火災だったと思いますが、ある保険会社の地下室に例会場を移しまして、もちろんオリエンタルホテル例会場は壊滅しております、事務局は全部壊滅し

ておりますから例会場を移さざるをえなかったんですが、その地下室に例会場を移してももちろん戦争中ですから電気は消えております。

蠟燭を灯してももちろん食堂なんてありません、皆弁当持参でその例会活動を続けたといえます。

戦争なんかにあって若干メンバーは減ったけれども、直木さんに聞いてみました、私たちの心の拠り所というのはロータリークラブの例会なんだよ、毎週1回例会に集まってきて己の足らざるところを他のロータリアンから学び取る、この例会がなくなったら私の生きる術がないじゃないか、だからどんな軍閥によって例会場が潰され、ロータリークラブが壊滅したにも拘らずこの例会活動を忘れることができなかった、とおっしゃっていました。

この戦前戦中のロータリアンのエネルギーがやがて昭和20年に国際ロータリークラブに復帰した時に、またそこから新しい歩みを始めたのです。したがって戦前に軍閥の弾圧によってロータリークラブが壊滅しましたその時に、首と胴がお坊さんの首がボンと飛び上がって跳ね上がって空中に留まったように首と胴が離れたのであります。

胴体がぱったりと倒れました。組織はなくなりました。制度もなくなりました。しかしロータリアン達が培ってきた良質な思想というものは潰れることがなくて、やがて9年後の昭和24年国際ロータリーが再び日本の社会に復活した時に、その9年前に飛び上がった思想の首が戦後のロータリアンの首にスパークと嵌まったという物語になるだろうと思います。

組織としてのロータリーが壊滅しても思想としてのロータリーは潰れないんだということの立証としては、こういうことではないだろうかと思えます。この戦前戦中の日本ロータリーの精神伝統、これは実は私たちの今のロータリーに受け継がれているのであります。それは、私が直に体験したことを申し上げますが、5年前の阪神淡路大震災で阪神間のロータリークラブは壊滅しました。私の家も倒壊してしまいました。一番ひどかったのは阪神間で芦屋から神戸市内にかけてのクラブであります。

その中で芦屋川ロータリークラブというのがありました。震災の2日目に元、芦屋川ロータリークラブの会長でした福本真一さんから私に電話がかかってきました。先生、例会場も事務局も全部

壊滅しました、メンバーの殆ども、自宅も事業所も全部潰されています。殆ど全滅です。先生例会をやってはいけませんかというのであります。例会やってはいけませんかといっても例会場も事務局も潰れて会員の家も事業所も全部潰れているのにどうやって例会ができるのかな、と私が聞きましたら、確かに例会場は駄目になりましたよ。しかし集まれるものだけ集まって道端でもどこでもいから集まれるものだけ集まって、お互いに安否を気遣い、そして励ましあって分かれようと思うのです。だから例会をやりたいんですという話でした。私がそれこそ本当のロータリーだ是非やってくださいといってその電話を切りました。

後で報告を聞きました、一番最初震災で壊滅したその次の週は13名集まりました。恐らく散散ばらばらになったんだろうと思います。13名それでも集まったと言っておりました。その次の週は21名集まったそうであります。第3週目には23名に増えた、段々増えていって結局芦屋川ロータリークラブは震災でそれぞれのものを失ったにも拘らず、一回も例会を休まなかったと言いました。

私の友人の西宮ロータリークラブの衣笠先生がね、みんなどうしているかなと思って芦屋ロータリークラブを尋ねたそうです、瓦礫の中の掘建て小屋の横の小さなところに紙でロータリアンの入り口と書いてあったそうです。衣笠先生はそれを見て嬉しかったねー、と言っていました。全てのものを失った時に何かに縋ろうとしたそれがロータリーの例会だったわけです。この心は私は尊いなどと思います。

それからもう一つあります。今R Iの理事をなさっていました今井鎮雄先生、あの方もホームクラブが神戸西ロータリークラブであります。私どもは震災があったあと先生方と一緒にいろんな情報の交換をやっていました。その中で先生の所属するクラブ神戸西ロータリークラブ、震災直後は交通も途絶して連絡も取れないで直後の次の週は駄目だったけれども2週目にはなんとか連絡を取り合って40名が集まった、どこに集まったかといいますがもちろん例会場は全部壊滅しています村野工業高校という高等学校があるのでございますがとにかく40名集まった、その学校には片一方には670体の震災でなくなった方の遺体が安置されていた、片方には820名の被災者が詰めかけていたわけです。

その中で40名で例会をして安否を気遣いながら励ましあったという報告を聞いております。やはり、この何もかも失った時に、ロータリーに集まろうとした人達の心、これはやはりロータリーに魅力があったからだだと思います。私はその話を聞いた時大変感動をいたしました。この異常時になって本当のロータリアンが本当のロータリークラブかということの真価がわかると思います。なんでもない皆が隆々と栄えている時には本当のロータリーかどうか分らなくなりますけれども、こういう異常事態で初めてその真価が分かるということを私は痛感いたしました。

イギリスには昔からロータリーというものは人間の魂のあり方の問題だという諺が残っております。私はやはりこの諺、その大震災の話を聞きますと納得することができるのであります。ロータリークラブの例会というのはロータリアンの心の拠り所でございます。昨年でしたか国際ロータリーのラヴィッツア会長が例会中心主義という言葉で提唱しました。まだ記憶に新しいことでもあります。ラヴィッツアさんは昔やっていたことをもう一度やり直そうじゃないか、というテーマを掲げられました。例会というものの組織とか運営が今非常に墮落しております。この墮落したロータリーを起死回生、立て直すためには皆がルールを守って、そして例会というのが一番大事なんだからこの例会をもう一度立て直そうじゃないか、戦前のロータリーのようにあの高潔な倫理をもって人々が集い励まし合って世のため人のために邁進していったあのロータリーというものをもう一度立て直そうじゃないか、これがラヴィッツア会長のコンシスタンスという言葉に集約されているわけでございます。今例会というものの意味、意義というものを私たちは忘れかけていると思うんであります。阪神間の西宮ロータリークラブというのがありますが、そこに八馬啓さんという有名なロータリアンがおられます。私もいろんなことを教えて戴いたんですけれども、その方があるとき、私どものクラブにメイクアップに来られました、1分遅れたんであります、遅刻したのであります。すると彼は1分遅れました、今日もうメイクアップにしないでください。しかしせっかく来たんだから皆さんと楽しく食事をして帰りますよといって食事をしてお帰りになりました。

私はその時入会後1年にもならなかった駆け出

しのロータリアンでございましたが、そのやり取りを見てこれが本当のロータリーだと教えられることがありました。それ以来私は例会100パーセント主義を守っております。自分を律することに八馬さんは非常に厳しいそして約束、ルールというものを守り抜こうとするその姿があります。

今は60パーセントルールなんていっていませんけれども、昔はそんなことはありませんでした。やはり自分はルールを守ってる、ロータリアンとして恥ずかしくないんだと胸をはっている、八馬さんは、そこに胸を張るからロータリアンとしての誇りがあるわけでありました。

ロータリアンの誇りについてもう一つお話をしておきます。これは私たちクラブと同じ分区分でございまして、川西というロータリークラブがあります、そこに藤木先生という歯医者先生の先生がいらっしゃいました、藤木先生があるときに川西ロータリークラブの理事会に対してロータリーの旗があるけれどもあれを譲ってくれと言いだしたんです。

クラブのメンバーがどうしてですかと聞いたら私はやがてこの世を去ります、私が死んだらあのロータリーの旗で私の遺体をくるんで葬ってください。クラブのメンバーはそれを聞いて感動しまして、よろしいお分けしましょうと、藤木先生がロータリーの新しい旗を買ってきてそれをクラブに進呈をして創立以来そこにかかっていたロータリーの旗を譲り受けられて、そして藤木先生がお亡くなりになったときにその旗で埋葬されたという話を聞きました。お坊さんがびっくりなさっていたそうです。

何故それが分かったのかといいますと、私はある時メイクアップに行きました、そのクラブは40年近いクラブでありますから旗が汚れているはずなのに非常に新しかったんです。こんなに新しいんですかと聞いたら実は藤木先生の物語があったわけです。私は本当に感動いたしました。昔はそういうロータリアンが沢山おられたのです。俺はロータリアンだといって胸をはる誇りを持ったロータリアンが沢山おられたのでございますが現状を見て見ますとちょっと心細くなってきた現象が多いだろうと思っています。先ほど八馬さんの例を引いて100パーセントルールと言いました。昔は100パーセントルールでずっと古きよき時代もロータリアンはそれが当然のようにやってきたわけですが、近來60パーセントルールというものが適用

されまして、この例会の与えられた時間の60パーセント在籍をしていけばそれで出席をみなす、出席とみなすという定款上のルールとして採択されるに至ったのであります。このこと自体大変残念なことなのですが、これもルールとして出来上がってしまった以上はやむを得ないと思います。

昔は100パーセントルール、従ってこの例会の途中で退場したり、途中から入場するというのは絶対にゆるされなかったのであります。S A Aという人が必ず番人として立っておりました、昔は宮廷で王様なんかのいろんなレセプションがあるときにその宮廷の秩序を維持する最高の権力者としてS A Aというのがあったのであります。

ロータリーの歴史の中では1906年ではありますが、入る時に正式の職制としてポールハリスとかマスクオールズという法律家がいましてそういう人たちの提案出来たように思います。このS A Aというのは会場の秩序を維持する最高の権力者、今で言えば、日本でいえば皇宮警察の署長ぐらいにあたるんですが、権限をもっておりました。そう人が例会会場の秩序というのを厳然として守っていった、逆に言いますとそれほど例会ということに皆は大事にしていたんです。例会の開催中にその途中で退場者が出ると例会の雰囲気は乱れます、途中から人が入ってくると例会の雰囲気が乱れることを極度に嫌ったのです。日本のロータリーだけではございません。おおよそクラブと名の付くものは、水いらずの親睦の場で、その雰囲気が乱れることを極度に恐れたわけです。

一番いい例をちょっと昔の話であります、1883年イギリスの上流社会に貴婦人のクラブがありました。名づけアレクサンドリアといいます、そのメンバーにはプリンセスオブウェイルズ、皇太子の奥様などがメンバーに入りました。あるとき、皇太子が例会場に入ろうとした。そこに門番のS A Aがいましてどこへいかれますか、妃に会いたい、S A Aがただ今例会中でございます、絶対に入れないのであります。たとえ皇太子であってもそこに入ることによって例会場の雰囲気が乱れる、それを防ぐのがS A Aと名づけられた職責なんです。日本のロータリーでもかなり厳格にS A Aがチェックしておりました。しかし現在は60パーセントルールであります。60パーセントいけば途中退席してもいいという形になってきた。人によれば60パーセントいけば退席する権利があ

るといひどいことを言う人がおりますが、決してそのようなものではありません。

これはやむを得ない場合例えば、例会中に奥さんが交通事故で入院なさったとか、そういうときにはじめてS A Aに申告してそして途中退席を認めて貰う、それで今は60パーセントが出来ましたから60パーセント在籍しない、例えば12時30分から始まって1時6分までいなければそれ以外の退場はどんな動機であっても出席にすることはできません。

昔は60パーセントルールはなく100パーセントルールでありましたが、しかしそういう善良の動機はそれはS A Aが私が後で出席の証明をとってみせますからどうぞ安心してお帰りください。点鐘後5分しかたっていないでも出席の証明を与えたのです。今は60パーセントルールがありますからそれが出来ない。逆に今度は60パーセント在籍していればどんな不純な動機、例えば彼女と逢引に行きたいからちょっと10分前に早引きしたいと、そういうときでも60パーセントさえあればそれは出席です。

こういう形になってきて大変残念に思いますけれどもルールとしてある以上はやむを得ないのであります。ところが60パーセント在籍していればいいのであります。今大会のロータリークラブ当たりではそれも守っていない。食事が済んで、会長、幹事さんの報告が済んで、S A Aからの報告が済んで、これからという時間に彼らがドーッと帰って行きます。60パーセントもいません1時6分までいないといけないのですが、50パーセントの1時ちょうどにはみんな帰って行きます。ひどいクラブでは50人60人団体で出て行きます。後に残っていたら悪いみたいな感じですね。私はがんとして残りますけれども非常に寂しい思いを致します。これがロータリーの現状であります。この辺のところをなんとかしないといけないよとラヴィッツアさんがコンシスタテンスという読み替えられらのです。その裏には昔のロータリーを取り戻そう、そのためにはルールを守ろうじゃないか、今のロータリーの衰退はロータリアンみんなが基本的なルールを守らなくなったからだ、だから魅力がなくなって会員数がどんどん減少していく、会員数の減少は不況が原因とは限らないのであります。

アメリカでは好況であるにもかかわらず会員は

減少しております。もっと他に原因があるだろう、これはラヴィッツアさんの分析であります。ハロルドトーマスという優秀な思想家がいました、ニュージーランドのウォークランドロータリークラブの出身でありまして、1959～1960年にかけてロータリーの会長をした人であります、その方がロータリーモザイクという有名な本を書きました、今日確か会長幹事さんの集まりでその紹介があったはずであります。

ロータリー文庫の石井パストガバナーがそこでお話をなさったと思います。ロータリーモザイクというのは元R I理事の松本兼二郎先生が素晴らしい翻訳を出しております。また読み取りでない方はちょうどロータリー文庫が6,000部復刻したそうですから是非お読み取りを進めたいと思います。何故ロータリーモザイクという名前を付けたかといいますと、ロータリー思想の世界というのはさまざまな世界があるわけでございます。

ポールハリスの思想もありますし、ハリストーマスの思想もあります、ガイガンテイ、フレデリックシェルドンといろんな人たちの素晴らしい思想がそれぞれ他を排斥することなくお互いがお互いを守りながらガッチリとモザイク模様のように形作っている。モザイクというのはガラスの破片であります、ロータリーも思想の世界を形成している、そういう思いを万感こめて名づけたのがロータリーモザイクという本の題名なんでありました。このなかでこれは年代順にロータリーのことを語りかけていますが、その一番の最終の1970年代順にロータリーのことを語りかけていますが、その一番の最終の1970年代の冒頭にハロルド・トーマスが言っているんであります、我々ロータリアンが憂慮すべき事態が起こっている。それは何か、ロータリーを今日の安定と力にまで築き上げた2つの原則、それが次第に希薄にさらに希薄にさせられていく傾向がある。その2つの原則とは何か一つは一つの職種が一人だけ会員を選ぶという一業一会員制の法則これでありました。もう一つは何か規則的な例会出席の重要性、そしてこの2つの原則はただ単なる原則ではない。この2つの原則のどちらか一つでもなくなっていくと、それはもはやロータリーと言えないほど重要な原則なんだと言い切っております。この一業一会員制と例会出席の原則、これが希薄にさらに希薄にされてロータリーの衰退がはじまっている。ラヴィッツア会

長が嘆かれるのも無理はないと思います。何とかしなければならぬんですが、この状態を放置しますと魅力がなくなっていく、古代ローマ帝国のように魅力がなくなって社会の要請がなくなったらロータリーも同じく滅亡の道をたどらなければならないだろうと思うのであります。これは一人一人ロータリアンに与えられたそれをもり立てる義務があるだろうと思っています。1960年エドマクロリンという国際ロータリーの会長が素晴らしいターゲットを打ち上げました。ユーロータリー、あなたがロータリーですよ、あなた一人一人がロータリーなんですよ、ロータリーの心を忘れないで頂きたい、一人一人のロータリーがロータリーを忘れた時にロータリーは崩壊して行くだろうということなんでありまして。やはり団体としてのロータリーを考える以前に一人一人のロータリアンの心の中からロータリーが消えれば古代ローマ帝国のように、どんなに巨大な帝国であっても壊滅して行くことと同じ事なんですから。ここのところは大事にしていけないと思うのであります。ロータリアンが誇りにすべきもの、今一つあります。それは職業奉仕であります。ロータリーのロータリーたる所以は、それは職業奉仕であります。ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にありという言葉は今から20年前ぐらいまえでありますね、私どもは耳にたこができるほど聞かされたのです。しかし今その言葉をほとんど聞くことがありません。これもロータリーの衰退の現れだと思えます。ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にあり、その中核にある思想は何か、職業奉仕であります。これこそロータリーだということを象徴的に表しているのが職業奉仕の思想なんでありまして。ロータリーというのは人類文化史がこの20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動なのであります、このことを忘れてはならないだろうと思えます。この職業人の倫理運動ということを変えて言いますと、全ての私たちの職業関係です。全ての行動に愛を込めるということでありまして。行動に愛を込める、具体的にどうということかと一つの例え話をしていきたいと思えます。

226事件の時に亡くなられた渡辺丈太郎大將のお嬢様に渡辺和子先生がいらっしやいます。ノートルダム聖心女子大学の学長を永い間やっておられました、退任されましてから日本カトリック

学校協会の会長さんをやっておられました。この先生が私どもの兵庫の2680地区と四国の2670地区の合同のライラセミナーに、過去に2回ほど来て戴きました。そのときに伺った話でございます。渡辺先生が29歳のときにカトリックの信仰に入られたわけです。30歳になると修道女になれないそうでありまして、ギリギリまでおられましてカトリックの信仰に入られたのでございます。信仰に入られるまでは部会を10くらい持った非常にエリート職責におられたのですが、その職責を投げ打って信仰の道に入られたわけですが、ある時アメリカの東部の方でボストンというところで、夏の暑い日に150人くらい入る大きな食堂でですね、食事の準備をされていたんです。ナイフとフォークとお皿を並べる作業であります。真夏の暑いときにいやだなあと思いつつナイフとフォークとお皿を並べておられた。するとある時先輩のシスターが渡辺先生に「シスターあなたは今何を考えていますか」と質問したそうです、先生はまた暑いし英語で答えるのも面倒だし「何も考えておりません」とおっしゃったそうです。そのシスターが厳しい顔になって「あなたは時間を無駄にしています」とおっしゃったそうです。先生はその意味がわからなくて「どうして」と聞いたら「同じお皿とナイフとフォークを並べるのであればどうして心の中でやがてその席に座る方のためにお幸せにと祈りながら置かないんですか」「何も考えないで漫然とお皿とナイフとフォークを並べて行く、これは時間を無駄にしていることですよ」と諭されたそうです。渡辺先生はその前に自分はいかに効率的に仕事をするかということをお教わられた。しかし仕事に愛をこめる時間に愛をこめる仕事の仕方は初めて教わった。それから自分には雑用という仕事はなくなっておっしゃっていました。なぜかといいますと雑用というものは人間が雑に仕事をする時にそれが雑用となるわけです。

どんな仕事も一生懸命心をこめてやる限りそれは雑用ではないのだ、私はそれによって救われたとおっしゃっていました。確かにその言葉を聞くまでは漫然とお皿を並べていきます。お皿とナイフとフォークはですね同じ時間で同じ速さで並んでいきます。しかし心の中で幸せにと祈りだしてからは同じ時間を費やし同じ姿で並んでいくけれどもその中に何が込められているかどうかということによって世の中は大きく変わっていくんだと

いうことを渡辺先生はおっしゃっています。

確かにこの目で見た限りではナイフとフォークとお皿が並んでいきます。心の中でお幸せにと祈っているか祈っていないかということは目に見えないことでもありますから分からない、しかし祈っているか祈っていないかということが重大なんだということをおっしゃっています。正に先ほどイギリスではロータリーは人間の魂のあり方の問題だと言ったことは納得できるだろうと思えます。もう一つその心の問題を突っ込んで今度はロータリアンの例を引いてお話ししておきたいと思えます。これはアメリカのロータリアンでございますが紙の製造業者、およそ紙なんて皆さんトイレトーパーをお思いになれば分かると思えますが、そんなのいくら売ったって利潤も少ないし、そしていい商売も出来ない、自分は悪い星のもとに生まれたなと絶望的にこの世を送っていたそうでありまして。しかしその人がある時、翻然として悟りました。それはなぜかといいますと食事というものが単に自分の食欲を満たすだけと考えればこれはつまらないものだと思うかもしれない。しかし考えてみると人々が毎朝食卓にパンを運ぶことができるのは自分が作っているこの紙あればこそ清潔な状態で食卓にパンをのせることが出来るじゃないか。だから単に食欲を満たすためだけにこの食事をするのであればそういう気持ちも起こらないかもしれない。

しかし食事というのは考え方をえますと、この宇宙を支配する神様の秩序体系のもとに帰依していく生命や命を維持するために食事をとるんだ、そういう考え方そのように考えますと食事すること自体が一つの宗教的儀式だと考えることもできます。この考え方はアメリカの東部に行くところの考え方があるようでありまして、ミシガン大学これが私の恩師の小堀憲助先生に教わった話なんです、ミシガン大学の食堂は、イギリスのケンブリッジ大学のキングスカレッジのチャペルを模して作られています。

これが何を意味するかまさに食事そのものが一つの宗教的儀式なんでありまして。従って食堂に入る時にはスーツを着てきちんと身なりを正して入らなければならない。アメリカの西の方にいきますとアロハシャツを与えて気楽にやっています。これは風俗習慣の違いであります。しかしアメリカの東部ではそういうふうにして食事を取るとい

う習慣があることを考えますと、食事を取ること自体も人の考え次第によっては神聖な儀式になっていく、この紙の製造業者はそのことに思いを致した時に、これは自分が間違っていた、心構えを変えたんであります。それから彼は一生懸命仕事に励むようになって隆々と栄えていったと言われております。

紙を作って売る行為そのものはお皿を並べる行為と同じでございます。以前と同じように紙を作って売っているに違いないのですが、その心構えが変わってきた、そのことによってそのロータリアンはロータリー職業奉仕の世界に一步足を踏み入れたということが言えるであろうと思えます。やはり仕事に愛を込めるということこれは大事であります。その愛を込めるその心は一体どこで作るのか言わずとしれたロータリークラブの例会で作るのであります。だから例会は大事なんです。

ラヴィッツア会長が例会中心主義を提唱なさったその心はまさに例会こそがロータリアンのよりどころであり、阪神大震災でも皆が壊滅したあとでも真っ先に考えたのがみんなが集まって例会をしようということだった。これを忘れてはならないだろうと思えます。愛を込めるということ大変大事なことであろうと思えます、もう一つだけ例え話を申し上げておきます。

愛を込める人々の幸せを祈るという言葉は大事でございます。今の天皇陛下がまだ皇太子殿下の時に万福寺をお尋ねになりました、その時に接待に出られた和尚さんが私は禅坊主だからこの寺が紀元何年に出来たとかこの篇額は誰が書いたとかそんな愚劣な話をするわけにいかない、そこで皇太子殿下に一つのお話をなされた。どんな話かといいますと韋駄天という仏の話でございます。韋駄天というのは韋駄天のごとく走る非常に早いことの形容詞に使われております。あの韋駄天の話なんです。仏様にもいろいろ位がありまして一番高い位におられるのが下に如来、大日如来、阿弥陀如来、如来という名前をついたお方でありまして。その次に菩薩という名前、普賢菩薩とか菩薩という名前がついた仏様、そしてさらに下に天のつく名前のお仏様、帝釈天、毘沙門天、そのお仏様の一人に韋駄天という方がおられるわけでございます。韋駄天という仏様はどういう仏様かといいますと、夜のとばりに、終わりが参りまして東の空が白んで参ります。そして太陽が山の端にちらっとのぞ

きます、さあーっと太陽が大地に差し込んで来るその一瞬を捕らえまして仏様の懐から出て仏様の御使いとして、例えば安満ガバナーの家に飛んでいきまして扉を開けてこの安満家に今日一日仏の幸があるようにとお祈りして扉を閉めて、そしてその隣の天津篤造パストガバナーの家に飛んでいって扉を開けてこの天津家に今日一日仏の幸せがあるようにとお祈りいたしましてそして太陽の光がさあーっとさした一瞬の間に全世界の家庭にそのように訪れまして一瞬のうちに仏様のもとに帰ってまいりまして、ただ今全世界の家庭に仏のメッセージを送ってまいりましたということ復命する役目を持った仏様のことを韋駄天というのであります。だから非常に早いことの形容詞に使われているのがその意味なんです。和尚さんは皇太子殿下にあなたはやがて天主様になられる方です、今日の老僧との出会いを大切になさって世の中に韋駄天という毎朝全ての人の幸せを祈る仏がいたことを心にとめておいて頂きたいとおっしゃったそうであります。人間でありますから好きな人もいます、しかし嫌いな人も憎い人も嫌いな人も一杯いるんであります。しかしその全ての人の幸せを毎朝祈る心というのは天主様になくはならない心だろうと思います。私はロータリーでよくこの話をしますが、それは何故かと言いますとロータリアンも一国一城の主であります。自分の部下将兵がどういう気持ちで会社の仕事をやっているのか、毎朝部下将兵の一人残らず幸せを祈る気持ちを持っている社長さんと、部下なんて安い給料で思い切り扱って自分が儲かれば良いと考えている社長さんとは会社のあり方が違うだろうと思います。そういう意味でロータリアンとしてもこの韋駄天の心を忘れてはならないだろうと思いますし、大きく言いますとこの地域社会の人たち国際社会の人たち全世界の人たち全ての人たちがこの韋駄天の心を忘れてはならないだろうと私は思います。そのことを象徴的に表しているのが1962年であります。インドのカルカッタロータリークラブからでましたニティシュラハリという偉大な国際ロータリーの会長がいました。彼が言いました。世界中のどこかの片隅に不幸な人がいる限り我々ロータリアンは永久に幸せになることができない。心の中に火を燃やそうという有名なターゲットを打ち上げたのであります。このニティシュラハリは心は韋駄天の心と全く同じ事でありま

すし、それがロータリアン一人一人の心であって欲しいなと心から願うものであります。

謝辞 ガバナー 安満良明

深川パストガバナーに素晴らしいお話をして頂きました。我々ロータリアンはもう一回例会を見直しまして、ロータリアンとしての誇りを持ちたいと思います。今日のお話を元に来週からは是非もう一回自分のクラブの例会を楽しみ意義あるものにしていって戴きたいと思ひます。今日は本当にありがとうございます。